山口県埋蔵文化財調査報告第111集

# 鍋倉遺跡

――県営圃場整備事業に伴う発掘調査報告――

1988

財団法人山口県教育財団
山口県教育委員会

# 序

近年、農業基盤整備事業の進展に伴い、県下各地の埋蔵文化財が掘り起こされ消失して行く頻度も多くなってまいりました。

私達の県土山口を築いてきた先人達のその永い営みを今に伝える数多くの歴史的遺産を、こうした開発との調整を図りつつ記録にとどめて後世に残すため財団法人山口県教育財団では、教育・文化の振興という立場から、本年度も山口県農林部の委託を受け、圃場整備地区に係わります埋蔵文化財の発掘調査を実施いたしました。

ここに報告いたしました阿武郡阿東町所在の鍋倉遺跡の調査では、平安時代と室町時代の集落跡が発掘され、鉄滓や土器類などこの地域の中世期生業を特色づける遺物が発見されました。これらの資料は、当時の人々の生活や文化を知る上で、貴重な手がかりを与えてくれました。

発掘調査の成果をまとめた本書が、学術・教育の資料として利用されることはもとより、ふるさとづくりの基礎資料として広く活用されることを期待するものであります。

調査に当たりまして、御指導・御協力をいただきました関係各位に対し、深甚なる謝意を表するものであります。

昭和63年２月

財団法人　山口県教育財団

理事長　高　山　　治

# 序

本県では、恵まれた自然環境のなかで豊かな地域社会の実現に向けて、農業基盤整備事業等の諸施策を推進しています。

こうした開発工事からかけがえのない埋蔵文化財を保護し、併せて、開発と文化財保護との調和のとれた県土づくりを目指して、山口県教育委員会では関係機関と協議を行い、遺跡の保存や発掘調査を実施しているところです。

昭和62年度は、阿武郡阿東町徳佐下に所在する鍋倉遺跡の発掘調査を実施し平安時代及び室町時代の集落跡を発見するとともに、当時の人々の生活や文化を知るうえで数多くの貴重な資料を得ることができました。本書は、その調査結果をまとめた記録であり、文化財愛護への理解を深め、教育並びに学術研究の資料として広く活用されることを願うものであります。

発掘調査の実施に当たり御協力いただいた関係各位に対し、厚く御礼申し上げます。

昭和63年２月

山口県教育委員会

教育長　高　山　　治

# 例　　言

1　本書は、県営圃場整備事業に先立って昭和62年度に実施した阿武郡阿東町大字徳佐下字上田に所在する鍋倉遺跡の発掘調査報告書である。

2　本書は、財団法人山口県教育財団が山口県農林部の委任を受けて実施した調査と、文化庁国庫補助金を得て山口県教育委員会が実施した調査との成果を合わせて報告するものである。

3　調査組織は次の通りである。

調査主体　財団法人山口県教育財団（理 事 長　高山　治）
　　山 口 県 教 育 委 員 会（教 育 長　高山　治）
事 務 局　財団法人山口県教育財団（事務局長　田中義人）
　　山口県教育委員会文化課（課　　長　工藤公照）
調査総括　山口県埋蔵文化財センター 所長　工藤公照、次長　中村徹也、係長　松岡睦彦
　　主任　前田耕次
調 査 員　財団法人山口県教育財団事務局　指導主事　藤井勝彦、調査補助員　木村明史
　　山口県埋蔵文化財センター　文化財専門員　西岡義貴
援　　助　山口県埋蔵文化財センター職員

4　調査にあたっては、山口県農林部耕地課・山口県山口土地改良事務所・阿東町役場・阿東町教育委員会および地元関係各位から多大な援助・協力を得た。

5　出土鉱滓については、日本産業史学会理事 葉賀七三男氏に分析を依頼し、玉稿を得た。

6　本書に掲載した地図は、国土地理院発行25,000分の１地形図「徳佐中」を複製使用したものである。また、航空写真はアジア航測Ｋ.Ｋ.提供のものを複製し使用した。

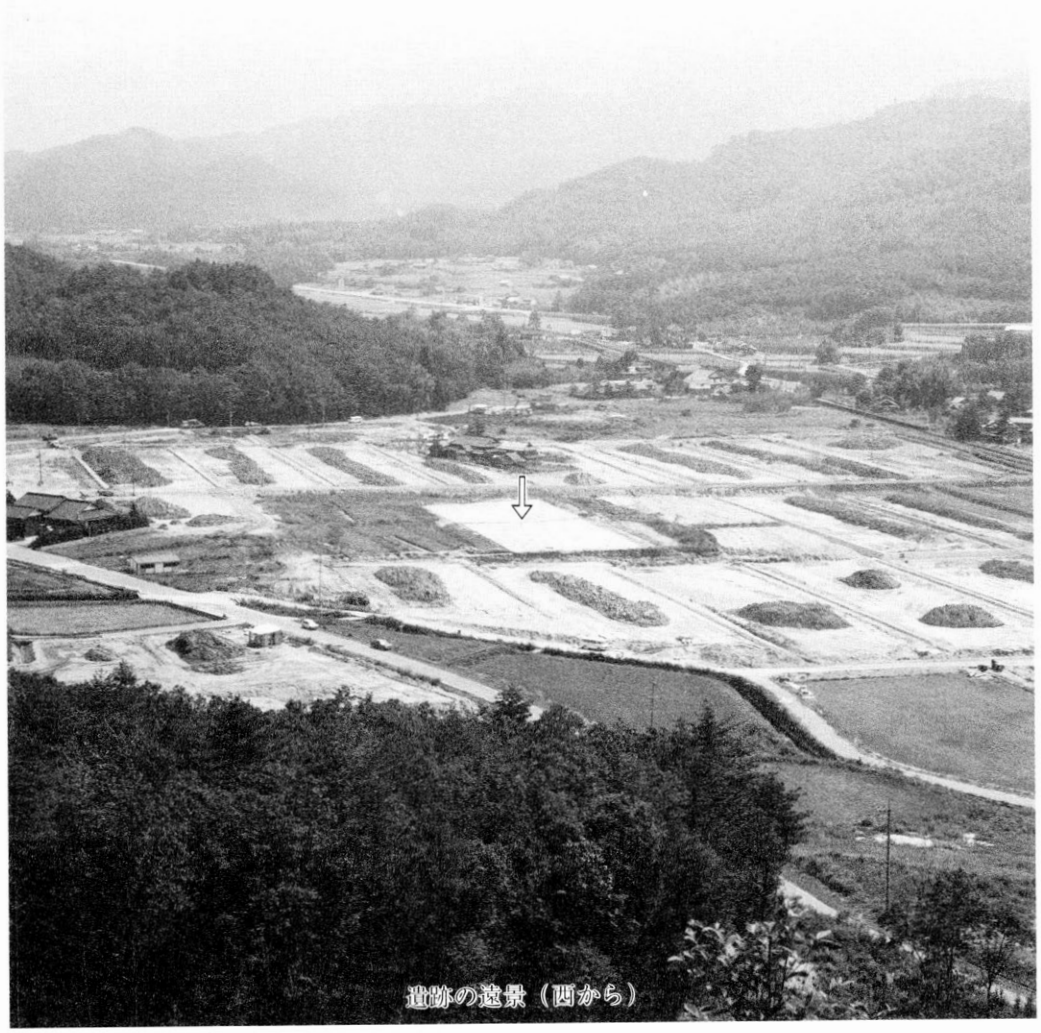
7　本書に使用した方位は、土壙・住居状遺構は磁北、掘立柱建物は国土座標の北で示し、レベルは海抜標高で標示した。

8　本書で使用した遺構略号は次のとおりである。

Ｐ；土壙　ＰＨ；柱穴　Ｂ；掘立柱建物　ＤＷ；竪穴式建物

9　実測図は全員、写真は西岡、本文は西岡・藤井、編集は藤井が担当し、中村の指導を得た。

遺跡の遠景（南から）


遺跡の遠景（西から）

# 目　次

Ⅰ　位置と環境 …… 1

Ⅱ　調査の概要 …… 3

Ⅲ　主な遺構と遺物 …… 5

1．堀立柱建物……（5）　2．土壙……（9）

3．竪穴式建物……（10）　4．出土遺物……（11）

Ⅳ　まとめ ……13

付編　出土遺構・遺物の金属学的調査結果 …… 葉賀七三男……14

# Ⅰ　位置と環境

遺跡の位置と周辺の遺跡

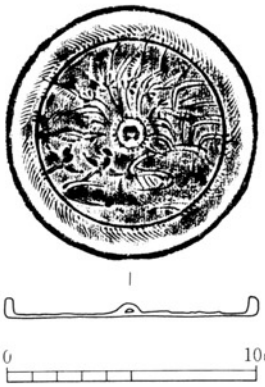
空から見た鍋倉

県北西端、阿東町嘉年の北部に水源を発し、途中、名勝長門峡を経て萩で日本海に注ぐ阿武川は、全長約82㎞の県下屈指の大河である。その上流域は、津和野－岐波構造線と呼ばれる断層により北東－南西方向に狭長に形成された断層谷がみられる。徳佐・地福は本構造線上に発達した比較的規模の大きい谷底平野で、両地の中間に鍋倉遺跡が位置している。盆地の縁辺は薄谷山（標高 585.3ｍ）や下深山（標高 783.1ｍ）から延びる山脚にとり囲まれていて、その東～南縁は盆地床を南流する阿武川により河岸段丘に開析されている。

鍋倉遺跡はこの段丘上のほぼ中央部（標高 282ｍ）に立地する平安時代と室町時代の集落遺跡で、行政上、山口県阿武郡阿東町大字徳佐下字上田に所在する。

鍋倉盆地ではこれまでに、本遺跡の北側の丘陵上一帯から宝篋印塔の散在や近世期の和鏡２面（堀彦文氏所蔵）が知られるのみであるが、隣接する徳佐・地福両盆地には縄文期以来の数多くの遺跡が分布している。中でも徳佐高校敷地内遺跡から出土した縄文時代早期（約７千年

宝筐印塔



和　鏡

0　10cm

地下上申絵図に描かれた鍋倉

前）の押型文土器や原遺跡で発見された縄文時代中期の土器群（阿高式土器・津雲A式土器）は最も古い時期に属するもので、九州或いは瀬戸内地域と幅広い交渉を行っていたことを窺わせる好資料である。当地に本格的な農耕文化が定着するのは弥生時代前期末のことである。惣の尻遺跡・坂手沖尻遺跡・宮ヶ久保遺跡・突抜遺跡等がその代表としてあげられ、とくに宮ヶ久保遺跡からは竪穴住居や高床倉庫等の建物群を取り囲む大環濠から土器や石器とともに農工具・食器・什器・紡織具・祭祀道具等が出土し、弥生時代の人々の豊かな生活文化の実態を知るうえで貴重な手がかりとなっている。一方、この時期の墓地としては小南墳墓群等があり、さらに後続する古墳時代に至り盆地周辺の丘陵上に散在する小規模な古墳群へと発展していった。とりわけ狐塚古墳は山間部唯一の前方後円墳であり、質的に熟成された弥生社会を引き継いでより広域の集団を掌握する首長の出現を物語っている。また、注目されるのは突抜遺跡・惣原遺跡・小南たたら等の鉄鉱石を原料とした製鉄関連遺跡である。良質な磁鉄鉱包蔵地帯を近隣に控える恵まれた自然環境は古代よりこの地方一帯に鉄生産のための素地をひらいていたものと思われ、位置的にみて鍋倉遺跡の性格を考える上で看過できない遺跡群であるといえる。

なお、寛延四（1751）年に描かれた『地下上申附録村絵圖』―徳佐村地下圖―（山口県文書館所蔵）によれば、鍋倉遺跡周辺は当時すでに水田化されていた様子がわかる。

# Ⅱ　調査の概要

調査前の状況

試掘する

重機で表土を剝ぎつつ
遺構を検出する

遺構を掘り込む

実測して記録する

県下各地で実施されている圃場整備事業は、農業生産基盤の整備をめざすものではあるが、同時に、地下に眠っている祖先の文化遺産の破壊を伴うことが多い。そこで、山口県教育委員会では、工事予定地内における埋蔵文化財の所在の有無と範囲を確認するための予察調査を実施し、この成果をもとに関係機関との間で調整を重ねてきた。

阿東町徳佐下地区は、昭和61年度冬期から総面積282haに及ぶ圃場整備の着工予定があったので、昭和61年10月に予察調査を実施した結果、本遺跡の所在を確認した。そこで、山口県農林部耕地課と協議したところ、現状保存が不可能との結論に達し、発掘調査を実施して記録保存を行なう運びとなった。

調査は、昭和62年７月１日から９月４日まで実施した。まず、遺跡の広がりと密度を把握するため、対象地区全域を試掘調査した。その結果に従い、遺構の分布状況から遺跡の残存している範囲を約2,200㎡と判断し、全面発掘することとした。

調査区域を便宜的にＡ・Ｂ・Ｃの３地区に分けた。Ａ地区は調査地の東半分の北側、Ｂ地区はその南側、Ｃ地区は調査地の西半分である。

水田の基本的層位は上位の耕作土（厚さ18～20㎝）、盤土（４～６㎝：暗灰褐色粘質土）を除くとすぐ地山土（黄橙色粘質土）となる。地山上の遺物包含層は薄く、遺構上面とともにすでに削平されている。

重機による表土の除去を行ない、地山面まで削ると遺構が現われた。おびただしい数の小ピット群である。遺構検出に続いて、遺構の掘り込みに移った。遺構を完掘すると、主な遺構の規模や構造を記録するために実測・写真撮影を行なった。また、国土座標によって設定した区画毎の遺構平面図を作成し、最後に空中から遺跡の全景を撮影して、現地での作業を完了した。

調査地区と周辺の地形

遺跡の全貌

# Ⅲ　主な遺構と遺物

調査区域から検出できた遺構は、総数1,300個を越える掘立柱建物の柱穴、40基を数える土壙、１軒の竪穴式建物である。柱穴から復元できた掘立柱建物は25棟で、その規模は１畳程度の平面積をもつ小規模なものから60畳を越える大型のものまである。出土遺物で目立つものは鉱滓である。これらはほとんどがＣ地区の西半分から出土しており、成分として鉄を多量に含んでいる。土器は、須恵器・土師器・瓦器が中心で、青磁の細片も数点出土した。これらの遺物から、この遺跡は平安時代と室町時代の２時期に営まれたものであることがわかる。

## １．掘立柱建物

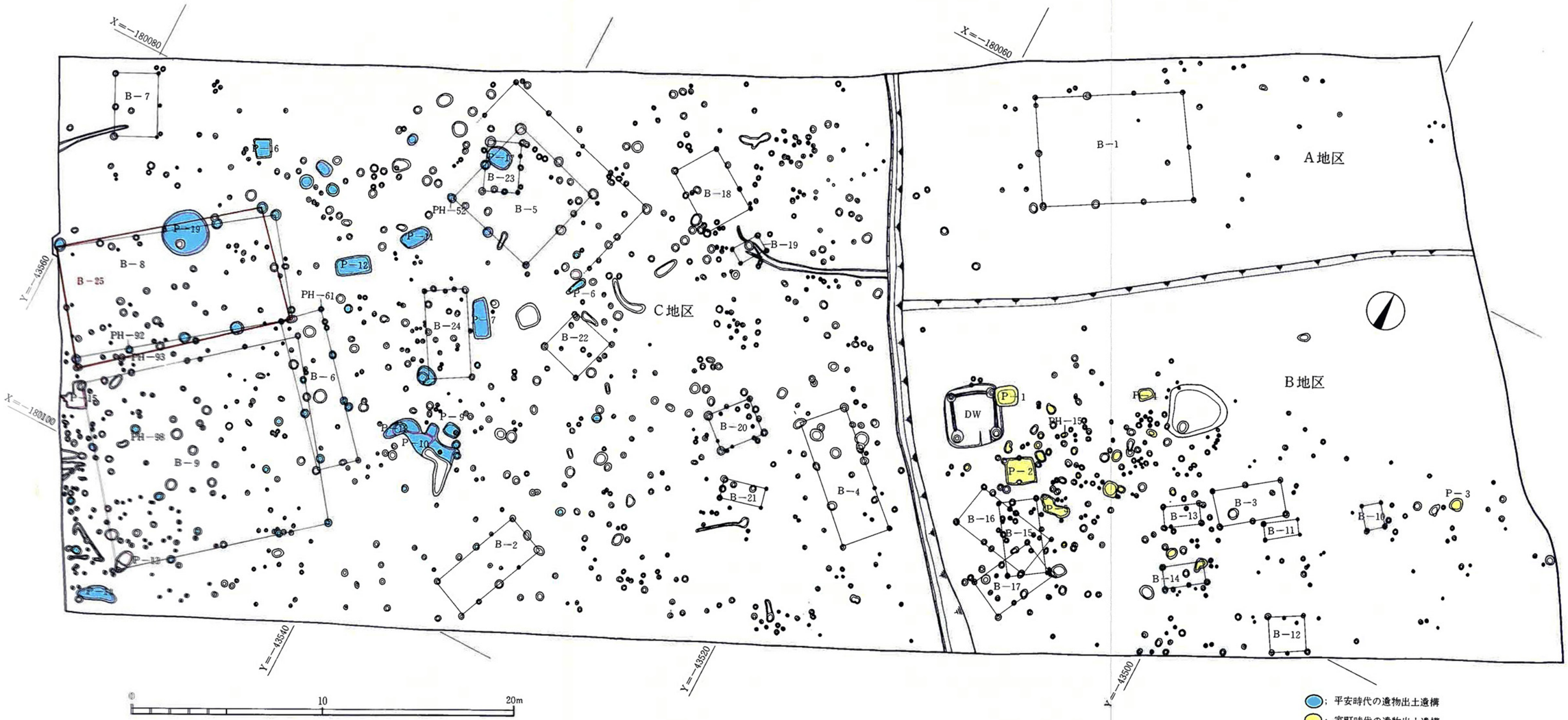
| 地区 | 建物番号 | 棟方向 | 規模 | 柱間 桁行(m)（建物南西隅から） | 柱間 梁行(m)（建物南西隅から） | 出土遺物 土師器 | 出土遺物 須恵器 | 出土遺物 瓦器 | 出土遺物 鉱滓 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| A | B-1 | N60°E | 2×3 | 7.9 (2.7・2.6・2.6) | 5.7 (2.8・2.9) | 甕口縁片 | － | － | － | 平安 |
| B | B-14 | N53°E | 1×1 | 2.3 | 1.2 | － | － | 鼎片 | － | B-3の付属棟か。室町 |
| | B-15 | N35°W | 1×2 | 3.8 (2.1・1.7) | 2.0 | － | － | 鼎片 | － | 室町 |
| C | B-22 | N14°E | 1×1 | 2.3 | 2.3 | － | － | － | ○ | B-5の付属棟か。 |
| | B-24 | N32°W | 1×2 | 4.5 (2.4・2.1) | 2.2 | 甕片 | － | － | － | 平安 |
| | B-6 | N41°W | 1×3 | 8.0 (3.1・2.6・2.3) | 2.2 | 甕片 | 椀杯蓋片 | － | － | P-11, 12参照。平安 |
| | B-2 | N23°E | 1×4 | 5.3 (1.2・1.4・1.3・1.4) | 2.3 | 甕片 | 杯片 | － | ○ | 平安 |
| | B-5 | N15°E | 2×2 | 5.2 (2.6・2.6) | 5.0 (2.4・2.6) | 甕片 | 杯蓋 | － | ○ | 柵列を伴う。平安 |
| | B-8 | N52°E | 2×4 | 11.4 (2.8・2.9・2.9・2.8) | 6.0 (2.8・3.2) | 甕(3個体) | － | － | ○ | 総柱建物。平安 |
| | B-25 | N50°E | 2×5 | 11.0 (2.1・2.4・1.9・2.3・2.3) | 6.4 (3.2・3.2) | 体部片 | 細片 | － | ○ | 棒状鉄滓。平安 |
| | B-9 | N38°W | 3×4 | 11.3 (2.8・2.9・3.0・2.6) | 9.8 (3.2・3.3・3.3) | 体部片 | 杯片 | － | ○ | 総柱建物か。平安 |

▲掘立柱建物表

復元できた建物は、Ａ地区１棟、Ｂ地区９棟、Ｃ地区15棟の計25棟である。その内訳は、規模が１間×１間で付属棟と思われるものが９棟、１間×２間の小さな建物が８棟、１間×３間のやや大きい建物が３棟、２間×２間・２間×３間・２間×４間・２間×５間がそれぞれ１棟ずつ、そして３間×４間のきわめて大きい建物が１棟である。

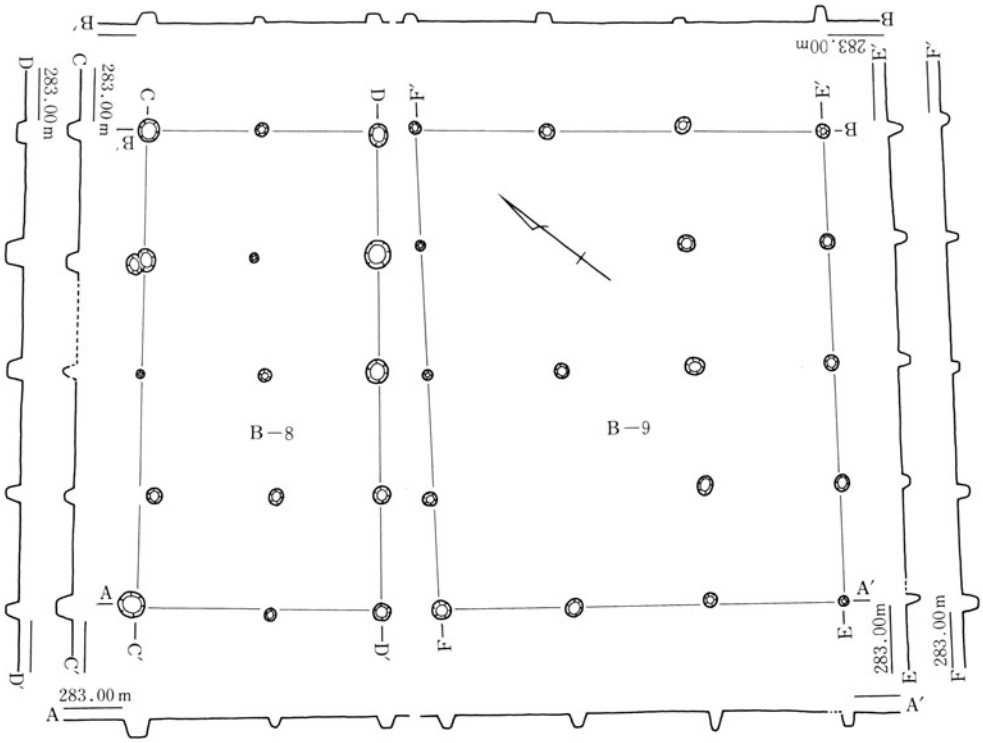
地区別に見ると、大きな建物はＡ・Ｃ地区に集中し、小さな建物はＢ地区及びＣ地区の東側に多い。柱穴から出土した遺物から判断して、おおむね大きな建物ほど古く（平安時代）、小さな建物は新しい（室町時代）。

Ｂ－５はＣ地区中央北部に位置する方形の建物である。その北側1.5mのところに並ぶ柱穴の列は、西側２m東側2.5mのところで南に直角に折れて続くことから、この建物が柵で囲まれていた様子が窺える。棟方向から見てＢ－22はＢ－５の付属棟の可能性がある。柱穴から須恵器の杯蓋が出土しており、平安時代の建物と推察できる。

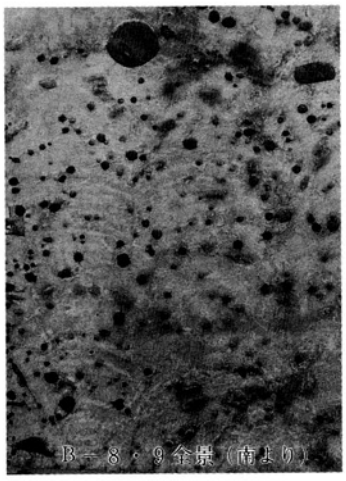

X=−180080
X=−180060
X=−180100
Y=−43560
Y=−43540
Y=−43520
Y=−43500
A地区
B地区
C地区
B−1
B−2
B−3
B−4
B−5
B−6
B−7
B−8
B−9
B−10
B−11
B−12
B−13
B−14
B−15
B−16
B−17
B−18
B−19
B−20
B−21
B−22
B−23
B−24
B−25
P−1
P−2
P−3
P−6
P−7
P−9
P−10
P−12
P−15
P−16
P−19
PH−52
PH−61
PH−92
PH−93
PH−98
PH−150
DW
0
10
20m
；平安時代の遺物出土遺構
；室町時代の遺物出土遺構
；鉱滓出土遺構

遺構配置図

<B－8・9>




B－8・9実測図　0　10m




これら2棟の建物は、C地区の西側3分の1を占める。

B－8は2間×4間の総柱建物で、柱間はほぼ2.9m、面積は約65.5m²（約20坪）である。柱穴の掘り方は直径50cm前後、深さ30cm前後としっかりしているが、北側の並び方が不揃いである。柱穴から平安時代の甕3個体分が出土した。

B－9は、本遺跡における最大規模の建物で面積約110.7m²（約33坪）を持つ。総柱と考えられるが、中柱2本が欠損している。B－8とB－9の間隔が0.9～1.3mと極めて接近しているが、棟方向や接する側の柱間が一致することから、この2棟は併存の可能性が高い。

遺構配置図に示したように、B－8とB－25はほぼ重なりあって建っている。これらの先後関係については明確な判断材料に乏しいが、参考になり得る状況を述べる。B－9との間が、B－8は90～130cmと開くが、B－25は90cmの等間隔で接している。しかし、柱間は、B－8がB－9と同じ4間に対して、B－25が5間である。

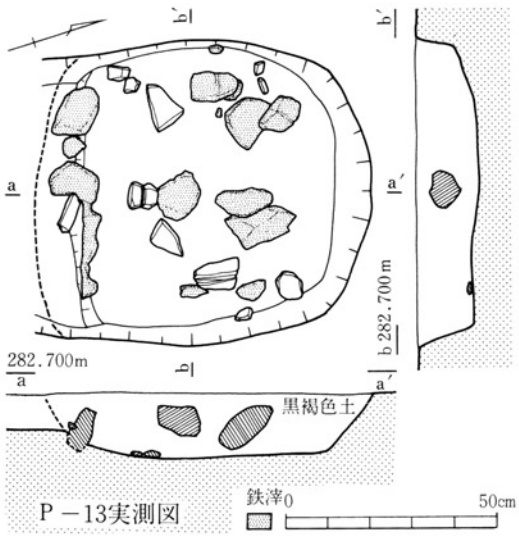
## 2．土壙

| 土壙番号 | 平面形 | 規模(cm) | | | 出土遺物 | | | | | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 長径 | 短径 | 深さ | 土師器 | 須恵器 | 瓦器 | 鉱滓 | その他 | |
| P-1 | 隅丸方形 | 124 | 110 | 32 | — | — | 鼎 | — | — | P.12—No.10 室町後半 |
| P-2 | 方形 | 152 | 134 | 14 | 皿片 | — | 鼎擂鉢片 | — | 石鏃 青磁片 | 室町 |
| P-3 | 円形 | 66 | 64 | 40 | 細片 | — | 細片 | — | — | 中世 |
| P-4 | 隅丸長方形 | 82 | 60 | 53 | — | — | 擂鉢片 | — | — | 室町 |
| P-5 | 不整形 | 170 | 50 | 29 | 皿片 | — | 鼎口縁片 | — | — | 室町前半 |
| P-6 | 長円形 | 136 | 48 | 9 | 甕口縁 | — | — | ○ | — | 平安 |
| P-7 | 長方形 | 207 | 90 | 7 | 体部片 | — | — | — | — | 古代 |
| P-8 | 楕円形 | 97 | 70 | 7 | 甕口縁片 | — | — | — | | 古代 |
| P-9 | 隅丸方形 | 84 | 70 | 20 | 体部片 | 杯身 | — | — | — | P.12—No.5 平安 |
| P-10 | 不整形 | — | — | 45 | 甕体部片 | 杯片 | — | ○ | — | 平安 |
| P-11 | 長円形 | 156 | 76 | 16 | 甕片 | — | — | ○ | — | 古代 |
| P-12 | 長方形 | 186 | 104 | 20 | 体部片 | 杯蓋 | — | — | — | P.12—No.2 平安 |
| P-13 | 隅丸方形 | 66 | 64 | 27 | — | — | | ◎ | 羽口 | |
| P-14 | 不整形 | 210 | 78 | 38 | 体部片 | — | — | ○ | 羽口・炭化物 | P.11.12—No.2 平安 |
| P-15 | 不整形 | — | — | 13 | — | — | — | ○ | — | |
| P-16 | 隅丸方形 | 102 | 90 | 14 | 細片 | — | — | — | — | 古代 |
| P-17 | 楕円形 | 136 | 103 | 60 | 底部片 | — | — | ○ | — | 古代 |
| P-18 | 楕円形 | 136 | 63 | 34 | 体部片 | 杯蓋片 | — | ○ | 炭化物 | 平安 |
| P-19 | 円形 | 250 | 240 | 15 | 体部片 | 杯蓋片 | — | ○ | — | 平安 |

▲土壙表

<P—13>

P—13遺物出土状況




P—13実測図

今回検出した40基の土壙のうち、遺物が出土したのは19基。それについては前ページの表からもわかる通り、B地区のP－1～5は中世／室町時代の遺構、C地区のP－6～19は古代／平安時代の遺構である。以下特徴的な土壙について述べる。

P－1　DWを切る。完形に近い瓦器の鼎が出土した。（p.12参照）

P－2　礫が多数出土した。意図的な配列は認められない。B－15の棟方向に沿っている。

P－7　B－24の棟方向に沿っている。

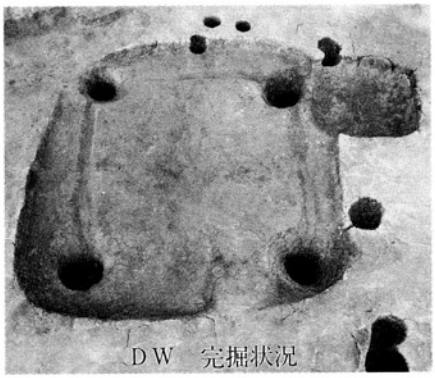
P－12　B－8の棟方向に沿っている。

P－13　壙底は焼熱を受けており、壙底及び埋土中には炭が多量に遺存する。また、多量の鉄滓が出土した上、炉の壁体片と見られる表面がガラス状に溶融している土塊や、羽口片も出土した。南側に並ぶ炉壁は、粘土に小石を混用して基礎部をつくり、壁状に仕上げている。この土壙は鍛冶炉跡の可能性が大きい。

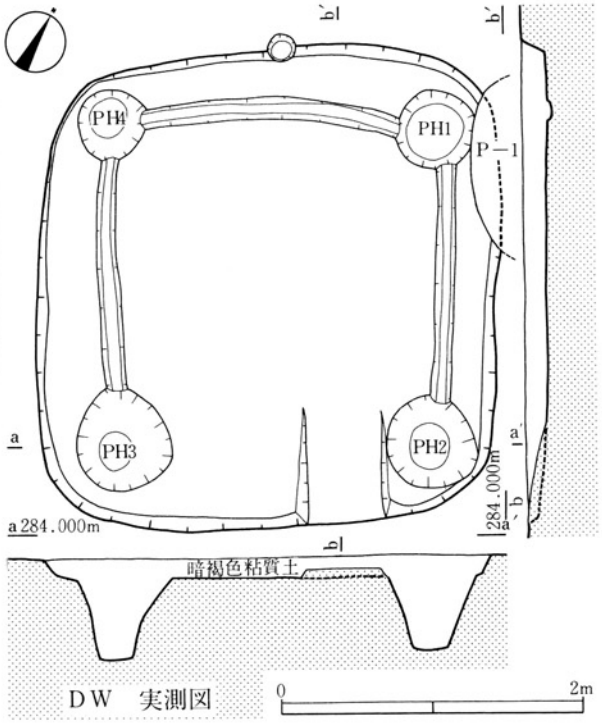
P－14　P－13の南に隣接する位置にあり、ここから羽口片が出土した。（p.11、12参照）

P－17　B－23の内部に含まれるが、遺構の先後関係は不明である。深さは検出した土壙中最も深い60cmを測る。

## 3．竪穴式建物



DW　完掘状況




DW　実測図

＜DW＞

B地区の西側に位置する。平面形は隅丸方形をなすが、北東隅部をP－1により切断されている。規模は長辺約310cm、短辺約300cm、壁の遺存高は約16cmを測る。柱穴は4個で、上面直径45～64cm、深さ42～55cm。これらの柱穴間に幅約16cm、深さ約4cmの浅い排水溝が設けられているが、出入り口側と考えられる南辺にはみとめられない。遺構内の埋積土は暗褐色粘質土の単一土層。床面上のほぼ全面にわたり薄い炭の堆積がみられ、室町時代前半の所産と推定される土師器・瓦器片が伴出した。遺構の性格は不明であるが、炭の多量出土などからみて工房であった可能性も指摘されよう。

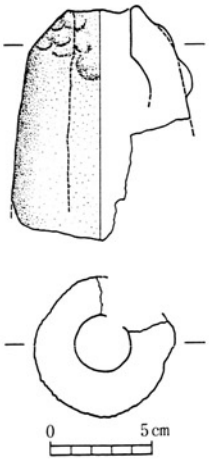
## 4．出土遺物

| 遺物番号 | 器種 | 器形 | 法量(cm) 口径 | 底径 | 器高 | 色調 | 胎土 | 焼成 | 形態・整形・調整 | 時代 | 出土地区 | 遺構番号 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 須恵器 | 杯蓋 | 10.5 | － | 1.6 | 灰褐 | 粗 | 軟質 | 口縁部は外反しながら下外方に下がる。端部は丸くおさめる。天井部は平らで、外面中央につまみの痕跡。内外面ともに右方向の回転ナデ調整。½残存。 | 平安時代 | C地区 | 表採 |
| 2 | 須恵器 | 杯蓋 | 14.3 | － | 1.9 | 灰褐 | 粗 | 軟質 | 口縁部は外傾し、端部は丸い。天井部はほぼ平らで外面中央に擬宝珠様のつまみを付す。右方向の回転ナデ後外面ヘラ削り調整、内底面横ナデ。¼残存。 | | | P－12 |
| 3 | 須恵器 | 杯蓋 | 13.0 | － | 3.0 | 灰褐 | 良 | 硬質 | 天井部はなだらかで、外面中央に環状のつまみが付く。体部から口縁部にかけ下外方に開き、端部は尖る。内外面ともに右方向の回転ナデ調整。¼残存。 | | | PH－52 (B－5) |
| 4 | 須恵器 | 椀 | 9.8 | 5.8 | 9.8 | 暗灰褐 | 精良 | 硬質 | 低い付け高台で、底部は厚い。体部は内湾ぎみに立ち上がる。口縁部はやや肥厚し、端部は丸くおさめる。内外面ともに右方向の回転ナデ調整。¼残存。 | | | PH－61 (B－6) |
| 5 | 土師器 | 杯 | 12.9 | 7.5 | 4.5 | 淡黄橙 | 粗 | 軟質 | 底端部は丸みをおび、体部から直線的に開く。口縁部はやや肥厚し、端部は尖りぎみ。底部ヘラ切り。内外面ともにナデ調整で、煤が付着する。½残存。 | | | P－9 |
| 6 | 須恵器 | 椀 | 15.5 | 9.5 | 6.3 | 淡灰褐 | 良 | 硬質 | 体部から口縁部にかけ外上方に直線的に開く。端部は尖りぎみ。底部は平らで、低い付け高台。内外面ともにやや粗雑な右方向の回転ナデ調整。¼残存。 | | | PH－98 |
| 7 | 土師器 | 甕 | 21.4 | － | － | 淡橙 | 良 | 軟質 | 玉子形の長胴で、口頸部は短く外反する。端部は丸い。底部欠失。外面は肩部以下に並行カキ目、内面は同心円タタキ後ナデ、口頸部は内外面ナデ調整。 | | | PH－92 (B－8) |
| 8 | 土師器 | 甕 | 25.0 | － | － | 淡橙 | やや粗 | 軟質 | 短く外反する口頸部に玉子形の長胴が続く。端部は尖りぎみにおさめる。外面は縦方向に丁寧なハケ、内面はヘラ削り後ナデ調整が施される。底部欠失。 | | | PH－92 (B－8) |
| 9 | 瓦器 | 鉢 | 15.7 | 12.1 | 7.2 | 褐黒 | 良 | 軟質 | 平底で、三本の短い脚が付く。体部の立ち上がりは直線的で、口縁端部はわずかに内傾する。外面は雑なヘラ削り、内面は並行カキ目、内底面ナデ調整。 | 室町時代 | B地区 | PH－15 |
| 10 | 瓦器 | 鼎 | 25.0 | － | － | 褐黒 | 良 | 軟質 | 口縁部は外反し、端部は内側に短くおさめる。外面底部は格子状タタキ、体部に指圧痕。内面は丁寧なハケ調整。脚部は縦方向のヘラ削りで、下半欠失。 | | | P－1 |
| 11 | 鞴羽口 | | 口内径 2.7 | 胴外径 8.2 | 胴厚 2.5 | 淡橙 | 良 | － | 細砂を含むが良質の粘土を巻くように貼り付け、手圧で成形した後外表面を叩いて仕上げている。全体的に焼熱のため強固に締まる。先端部に鉄滓付着。 | － | C地区 | P－14 |

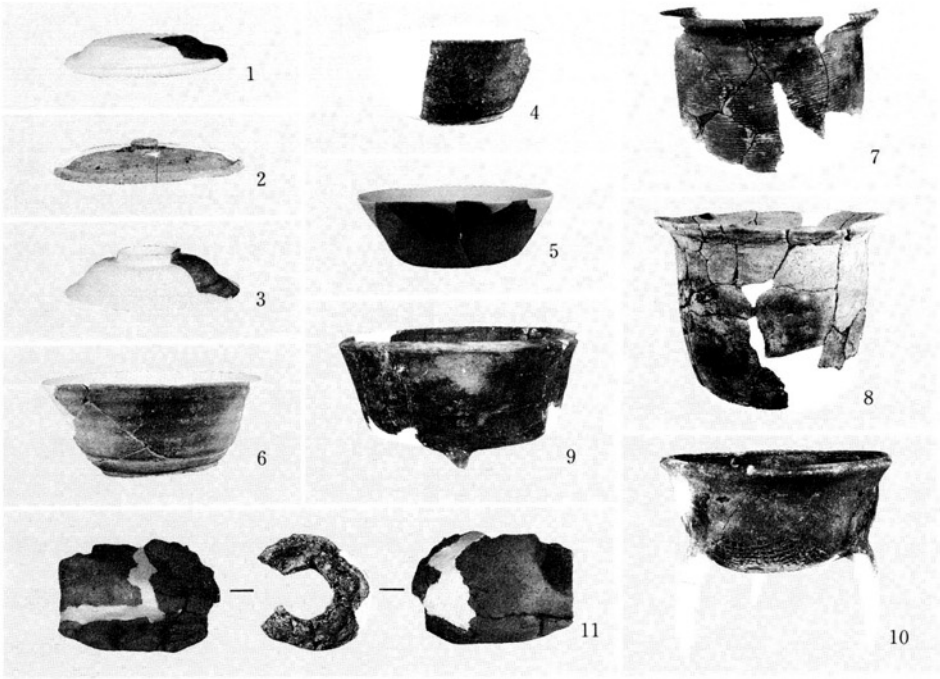
▲出土遺物表

柱穴総数約1,300個の内、遺物が出土した柱穴は約10％の138個、土壙は40基の内19基であった。遺物の内訳は、土師器が最も多く40％を占める。次いで鉱滓が30％、瓦器20％弱、須恵器10％強と続く。その他、遺構から青磁片４点、石鏃２点、フレイク３点が出土した。土師器は平安時代の甕片が圧倒的に多く、中世の薄手の皿片は３点であった。出土地区が明確に分かれており、Ａ・Ｃ地区から出土するのは土師器の甕・須恵器の杯・鉱滓であり、Ｂ地区及びＣ地区の東側から出土するのは瓦器の鼎や擂鉢・青磁片である。

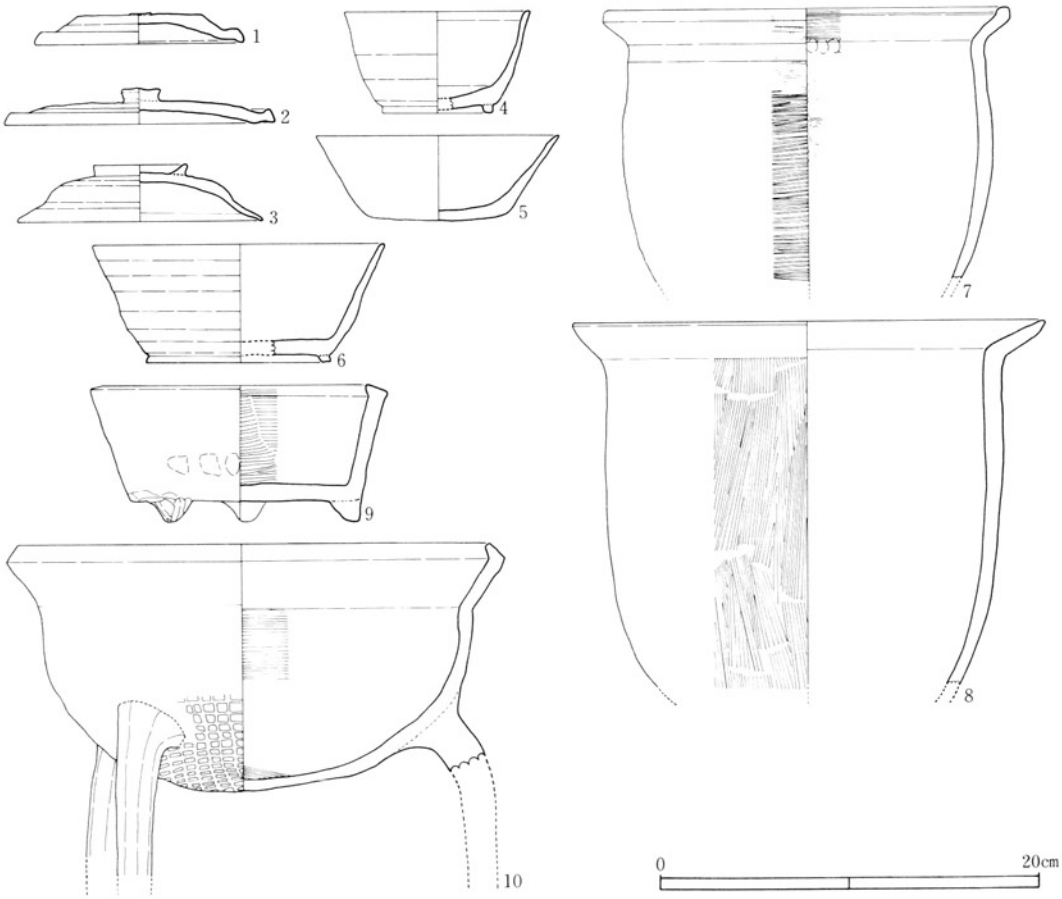
出土した鉱滓の総重量は17.0kgであった。そのうちの51％にあたる8.7kgの鉱滓がＰ－13から出土した。鞴(ふいご)の羽口片はＰ－13･14から出土したが、この羽口はやや厚ぼったいことから、新しい時期のものではないことが推定できる。また棒状の鉄滓がＰＨ－93から出土した。これについては付編「出土遺構･遺物の金属学的調査結果」を参照されたい。



羽口（No.11）実測図




出土遺物




出土遺物実測図

# Ⅳ まとめ

＜遺跡の年代について＞

今回出土の須恵器は古い型式の後期に属する。特徴的な環状つまみをもつ杯蓋は、県内では末原窯跡群・百谷窯跡群・周防国府跡・周防鋳銭司跡・見島ジーコンボ古墳群等で出土しており、大半が9世紀中葉を前後する時期に比定されている。復元できた杯蓋3個体は、環状つまみ・擬宝珠形つまみ・つまみなしとそれぞれ形を異にするが、須恵器編年図[1]にあてはめると、実年代は9世紀前半～中頃が与えられる。

また、復元できた土師器の甕は、口縁部が「く」の字状に外傾し、胴張りがなく、最大胴径が口径より小さい。このような特徴を持つ土師器の甕は8～9世紀に比定される[2]もので、末原2号窯[3]（9世紀）出土の土師器の甕と類似している。

もう一つの時期を示すものは瓦器である。鼎は平安時代末に姿を現わした防長地方特有の瓦器で、室町時代後半まで続く。本遺跡では室町時代の前期から後期に至る時期の鼎[4]が出土した。

以上のことから、本遺跡は平安時代と室町時代の2時期に営まれた集落遺跡であるといえる。

隣接する徳佐・地福両盆地には、縄文土器が出土し、弥生集落や古墳の存在が確認されている。そこで当初は、この鍋倉盆地にも弥生時代の集落跡があるものと考えられていたが、今回の調査では、奈良時代以前の遺構は検出できず、遺物も出土しなかった。ただ、数点の石鏃が出土したことによって、ここで狩猟活動が行われていたことが窺えるのみである。地形的に大きな広がりを持たないこの鍋倉は、平安時代まで自然のままの姿を留めていたのであろうか。

＜集落の性格について＞

ともあれ平安時代前期に始まったこの集落はどのような性格を持っていたのであろうか。それを解くカギは桁行・梁行共に10m前後の大きな建物と、多量に出土した鉄滓や炉跡らしき遺構にあると考える。

県下における平安時代の大規模な掘立柱建物の出土例は極めて少なく、周防国府跡の浜ノ宮[5]や国衙[6]の6×3間、律令国家の地方官衙の一つと推定されている[7]秋根遺跡の7×4間くらいである。下右田遺跡の5×2間はぐっと小さくなるし、右田一丁田遺跡の5×4間は鎌倉時代に下る。面積では、本遺跡B－9の110.7㎡は、浜ノ宮85.3㎡国衙93.4㎡を凌ぎ、秋根132.3㎡に次ぐ。

規模から見る限り、鍋倉には特別な施設があったと言える。それは、製鉄に関わる「勘場」的施設であった可能性も考えてみる必要がある。鍋倉遺跡が更に明確な姿で今日によみがえることを期して、今後新たな資料の収集に努めたい。

参考文献　1）池田善文「歴史時代須恵器編年図」（『山口県の土師器・須恵器』周陽考古学研究所 1981）/『陶邑Ⅰ』（大阪府教育委員会 1976）
2）西　弘海「西日本の土師器編年図表」（『世界陶磁全集2 日本古代』小学館 1979）
3）『末原遺跡』（山口県教育委員会 1980）
4）『下右田遺跡 第4次調査概報・総括』（山口県教育委員会 1980）
5）『周防国府跡昭和51年度発掘調査概報』（防府市教育委員会 1978）
6）『防府市文化財調査年報Ⅳ』（防府市教育委員会 1981）
7）沢村　仁「建築遺構について」（『秋根遺跡』下関市教育委員会 1977）

山口県埋蔵文化財調査報告　第111集

# 鍋　倉　遺　跡

―昭和62年度県営圃場整備事業に伴う発掘調査報告―

昭 和 63 年 2 月

編集　財団法人　山口県教育財団
（山口市大手町2130）
山口県教育委員会文化課
（山口市滝町１－１）
山口県埋蔵文化財センター
（山口市春日町3-20）

発行　財団法人　山口県教育財団
（山口市大手町2130）
山口県教育委員会
（山口市滝町１－１）

印刷　瞬報社写真印刷株式会社
（下関市大字清末1328番地）